

重症薬疹の早期発見と治療

スティーブンス・ジョンソン症候群 (SJS) や中毒性表皮壊死症 (TEN) という重症薬疹は、急性期を過ぎても失明など眼に後遺症が残るケースが少なくありません (図1)。

しかし、早く気づき、診断・治療を行えば眼の後遺症を抑えることが可能です。薬疹が疑えるケースでは、皮膚科はもちろん、できるだけ早く、眼科にもご連絡下さい。

皮膚に重篤な炎症を引き起こし、生命にもかかわるSJSとTENの発症には、さまざまな原因が考えられていますが、抗生物質、解熱鎮痛薬、抗てんかん薬の三つが原因である場合が多いとされています。

眼に炎症を引き起こす薬物は、解熱鎮痛薬が多く、抗てんかん薬は少ないようですが、こうした重症薬疹のうち7割に眼の炎症がみられ、角膜びらんなど重篤なケースでは失明に至る場合もあります。

眼に症状の現れる患者さんを調べると、口腔・口唇のびらんを合併することが多く、中でも、ほとんどすべての患者に爪の炎症や変形が見られます (図2)。

重症薬疹による眼の後遺症は、発症早期にステロイドを上手く使って治療を

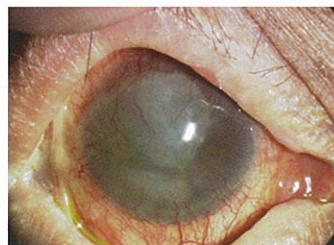


図1 スティーブンス・ジョンソン症候群慢性期の角膜混濁

行えば後遺症を減らし失明のリスクを減らすことができると考えられます。口や爪の状態に注意し、薬疹が疑えるケースでは、早期に眼科受診をしましょう。

ところで、SJSとTENで、重度の視力障害を起こす患者さん110人の遺伝子を調べてみると、免疫に関係する二つの遺伝子が特定の型であることが多いことが、私たち京都府立医科大学と東京大学のグループの研究で最近分かってきました。

遺伝子解析の結果、白血球抗原の遺伝子型HLA0206、抗ウイルス受容体の遺伝子型TLA3があると、それぞれ発症頻度が高く、両方あると相乗効果で、無い場合の50倍も発症しやすいことが判明しました。

将来、遺伝子解析によって早期に発症しやすい体質を知ることができれば、予防や治療に大きく役立てることができそうです。

(外園千恵)



症状	あり	なし	不明
結膜炎	94	0	0
口腔・口唇のびらん	82	0	12
性器周囲のびらん	46	18	30
爪囲炎・爪の変形	94	0	0

Sotozono, C et al. Ophthalmology 116:685 2009

図2 患者94名における発症時の粘膜障害

高齢者の斜視手術

テレビタレントの例で斜視手術が注目を集めました、若いときには隠れていた斜視が加齢とともに顕在化するなど後天的な斜視が最近、増える傾向にあります。矯正手術が適応となる可能性がありますので、気になる方は、ぜひ一度、眼科の門を叩いてください。

斜視には外斜視、内斜視、その他 (上、下斜視など) があり、手術を行う斜視のうち最も多いのが外斜視で約60%、内斜視30%、その他10%です。原因は様々ありますが、片方の視力が悪いと、その眼がモノを見ようとしくなり勝手な方向を向いてしまうこともあります。また眼鏡をかけた状態でも斜視が明らかな場合、すなわち眼を動かす神経や筋肉に問題がある場合、これらの筋肉 (外眼筋) の位置を調整することで、矯正できることがあります。

斜視の手術は、学童期に行う場合が多いのですが、斜視

そのものは、年齢にかかわらず存在します。京都府立医科大学眼科の場合、過去4年間で279例の斜視手術を行いました、うち22例が60歳以上の方でした。最近ではさらに60歳を超えてから顕在化する例が多いように思われます。

さらに斜視は、眼精疲労の原因の1つになることもあります。高齢者では白内障の進行などで視機能が弱くなると、隠れていた斜視が出てくることもあるのです。普通、左右両方の眼でモノを見ており、これを両眼視といいます。斜視が出てくると、片方でしか見ていないか、頑張らないと両眼で見ることができないようになり、これが見えにくさと眼精疲労を引き起こしてくるのです。また強度の近視の人の中には、加齢とともに眼球を支えている筋力が弱くなって斜視が目立ってくる場合があります。

前立腺肥大症治療と白内障手術

前立腺肥大症の治療で使われる、ある種の薬剤が、意外にも白内障手術に悪影響を及ぼすことがあることが最近分かってきました。ですから、とくに泌尿器科の先生にお願いしたいのですが、薬を使用する前に患者に白内障がないか、場合によっては治療の前に白内障の手術を済ませられないかを考えていただきたいのです。

前立腺肥大症は、加齢とともに前立腺の細胞数が増加して肥大化する疾患です。食生活の欧米化などで、現在では、80歳までに日本人男性の80%が罹患するといわれています。前立腺が肥大すると、尿道閉塞によって排尿困難や膀胱機能に変化が現れたりします。

症状によって薬物治療や手術が行われます。薬物治療には交感神経 $\alpha 1$ 遮断薬や抗男性ホルモン剤などが使われますが、このうち $\alpha 1$ 遮断薬のハルナールやユリーフといった薬剤が眼の虹彩にも作用しているようなのです。

ハルナールとユリーフなどに代表される $\alpha 1$ 遮断薬は、前立腺や尿道平滑筋にある α 受容体を遮断して尿道を弛緩させる薬ですが、これらの薬剤は、同時に白内障手術の際に術中虹彩緊張低下症候群(IFIS)を引き起こすことがあるのです。

白内障は、水晶体が灰白色や茶褐色ににごり、ものがかすんだり、ぼやけて見える疾患で、発症は高齢者に多く、加齢とともに増えます。視機能が低下した時点で濁った水晶体を取り出して眼内レンズを入れる水晶体再建術を行います。ハルナールやユリーフを一度でも飲んだこ

とのある患者は、IFISつまり虹彩のうねりや進行性縮瞳を起こし、重症の場合は、術中に虹彩が創部より脱出して手術が非常に困難になる場合があります。

発症頻度はハルナールまたはユリーフの投与例の約60%程度に少なからずIFISの兆候が認められ、うち30%程度では非常に手術が困難になる重傷IFISと報告されています。

前立腺肥大症と白内障手術のこうした関係は、泌尿器科の先生や内科の先生たちには、まだあまり知られていないようです。休薬や投与期間には左右されませんので注意が必要です。
(稲富 勉)

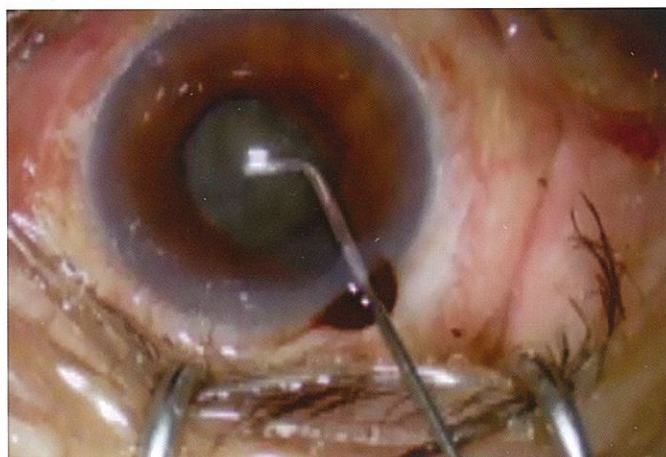


図 IFISによる虹彩脱出

虹彩の張力が低下して手術中に創部より虹彩脱出をきたす。

手術は眼球の外側の手術であり、眼科手術の中では比較的単純なものです。眼球には外眼筋という6本の筋肉がついていて眼球の動きを制御していますが、この筋肉の付いている場所を調整することによって正しい眼位に戻します。局所麻酔で長くて1時間の日帰り手術で済みます。手技自体は単純なのですが、経験値がモノを言う手術ですので、やはり慣れた専門家のいる眼科を訪問することをお勧めします。

「もう70歳も過ぎているのに」などと言わず、斜視手術によって快適ライフをお楽しみください。(中井義典)



左眼内斜視(手術前)



左眼内斜視(手術後)